館報たつおか

発行所
飯田市竜丘公民館
編集人
竜丘公民館広報委員会
印刷所
龍共印刷株式会社
飯田市上郷黒田 ☎22-5353

人口	6,670人
男子	3,268人
女子	3,402人
世帯数	1,928戸

（7年8月31日現在）

"猛暑の夏をさらに熱く"

人形劇カーニバル'95開催!!

今年も飯田のまちを賑わせた人形劇カーニバル。りんごんと合わせて飯田の夏に彩りを添えて、十七回を数える。八月三日から六日にかけて各地区で開催され劇人の思いが観客へと伝えられ、人とのふれ合いの輪が広がった。

むすび座の熱演

四日間の公演期間中、竜丘地区にも、全国各地のアマチュアやプロまで様々な劇人・劇団が訪れました。

この夏の記録的な猛暑の中にあって、劇人の繰り広げる力一杯の舞台は、大勢の観客の心をさらに熱くさせました。

竜丘全体で販売されたワッペンは八百二十七枚に達し、入場者数も千七百八十一人と昨年を約三百人上廻る人数となり、どの会場も大勢の観客で埋まる光景を目にするにつけ、改めてカーニバルが市民の間に浸透してきているのを感じました。

竜丘小学校では、人形劇団「むすび座」の公演が行われ、切り絵を人形がわりに使う大変珍しい上演や、うるさい音の大好きな王子が静かな音の素晴しさに気づくというお話を、沢山の人形やロープを使った熱演にだれもがくぎ付けになりました。

竜丘公民館では、市民人形劇教室「ミール」と劇団「ぽっぽ」の公演でした。中でも「ぽっぽ」は会場全体を暗くし、ライトで人形を浮かび上げる〝ブラックライト〟という技法で、月をどこまでも追いかけるねずみの話に、いつの間にか引き込まれ声援を送る子供達の姿が印象的でした。

長野原区民センターは、パネルシアター「にんじん」とパペットステージ「ぷか」の公演でした。太鼓の音を大きく使い、青鬼と赤鬼の話をしてくれた。「ぷか」の公演は、人間が鬼となって出てきたり、大きな太鼓の音に泣き出す子供もいたりしましたが、最後まで大勢の観客で賑わいました。

上川路公民館は、「どらねこ」と「たんぽぽわらべ」の公演でした。人形で民謡ショーを繰り広げたり、劇の幕間に観客で来ていた他の劇団員が中心となり、レクリエーションをするなどほのぼのとした雰囲気でした。

駄科公民館では、人形劇団「あぽ」と竜丘小学校「丘の子劇団」の公演でした。「あぽ」は大阪弁を用いその独特の言い回しや、人形のあやつりが面白く、「丘の子劇団」は日頃の練習の成果を発揮し、一生懸命の舞台でしたが、失敗しないようにと見る側がドキドキする一幕もありました。公演後花束を贈られほっとした様子でした。

その他、桐林区民センターで「くれよん」と「みっくすじゅーす」の公演がありました。

各公演に際し、上川路では独自にチラシを作成したり、多くの会場で交流会を行うなど、それぞれに工夫しカーニバルを盛り上げました。駄科の交流会では子供達も楽しめる内容であったり、長野原では参加者全員で大合唱をし、後日劇団よりお礼の手紙が来るなど、心と心の触れ合いがもたれたことは、きっと来年への活力となるでしょう。

最後に今後の課題として、平日開催が多いこともあり青年やお父さん達の姿が少なく思われました。とかく人形劇は子供の対象と思われがちですが、今日飯田に根づいてきたカーニバルを更に発展していくために、多くの人の創意工夫を結集したいものです。

演じ終わってホッと一息

祝開校「大人の学校」

身近な授業が好評

生徒募集中

竜丘に新しい学校が開校しました。その名も「大人の学校」です。今年度の公民館事業計画で、高齢者学級を作ることが決りました。

「大人の学校」と名づけたのは、多くの人が学ぶことに意識が持てるように、事前打合わせを四回程行った中で、運営委員の人達により決まりました。

七月十六日に開校式が行なわれ、学校長には公民館長が就任し、運営委員を中心に、現在六十一名の生徒が毎月一回、二時間程度の授業に熱心に取り組んでいます。

事前に、希望する受講内容について、アンケートを取り、竜丘地区内で関心のある行事や歴史、料理や食べ物、健康づくりなど盛り沢山の学習計画がたてられています。

例えば、竜丘の山野草を知る〔地理・理科〕や、絵手紙でこんにちは〔図画〕といったテーマを、各教科に置きかえられています。中には、これからの生き方について、和尚さんのお話しを聞く〔修身〕という今ではない教科もあります。

教科書は、以前に公民館で創った「村の道しるべ」「丘の語り部」が使われているのも特徴です。

そして、自分達が学んできたことを学び直し、伝承するために、小学生たちとの交流をしながら、竜丘で一番のものを探すギネス竜丘の形づくりをする〔理科〕といった教科もあります。

毎月の授業の他にも、お茶やゲートボールなど、希望者同志で集まり、生徒の中で先生のできる人が教え合うといった楽しみも組み込んでいきたいと考えています。

入学希望の方は、随時入学受付しておりますが、長期間学べる六十歳以上の人という条件がついています。

毎年、年単位で終業式は考えていますが、卒業式はない、楽しみな「大人の学校」です。

9／12　山野草について学ぶ

"おまたせしました"

県道駄科大瀬木線

駄科バイパス開通

県道駄科大瀬木線と国道一五一号線を結ぶ駄科バイパスが、長期に渡る工事のすえこのほど完成し、去る七月十一日に、ご尽力いただいた県・市をはじめ、地権者並びに関係各位により開通式が行なわれた。

この県道駄科大瀬木線は、国道一五一号とアップルロード、知久町中村線を結ぶ幹線道路で、飯田インターチェンジや市街地への重要なアクセス道路となっている。

しかし国道一五一号線との交差点が狭く変則であるために、駄科公民館附近の市道を通行する車輌が多く、朝晩の通勤時間を中心に渋滞する場面があり、取り付け口の不便性の解消が、長年の懸案となっていた。このような背景から昭和六十三年度に着工し、総事業費二億円をかけ延長二百四十メートルが完成した。

開通から二か月が過ぎ、気づいた方も多いと思いますが、バイパスは大井線側交差点が、若干変則的になっているので、通行には充分注意していただきたい。

いずれにしても、交通の流れが変わると、様々な方面で変化が生まれる昨今の車社会だけに、バイパスのもたらす公益性を、我々住民も広い視野で見守りたいものである。

開通式

ヤブ蚊

早いものでもう十月、先月日本列島を襲った戦後最大級の台風十二号等様々な事が起った。

一月十七日の早朝、兵庫県南部地方を襲った大地震は、五千五百人余の人命を奪い数多くの建物や交通網に甚大な被害を与えた。

この阪神大震災によって、被災された方々は、全国の方々の励ましや援助により、徐々に生活を取り戻してきているが、不自由さはいなめない。

三月には、首都東京において、地下鉄サリン事件が発生し、無差別テロとして国民を震え上らせた。

事件は、宗教法人の影に隠れた、拉致・殺人等の犯罪に広がり裁判を通して、真実が明らかにされて行くと思うが、この様な暴力行為は決して許されるものではないと思う。

又、信者達の姿を見ているとマインドコントロールの恐しさを改めて思いしらされた。

九月四日には、沖縄で米兵による少女暴行事件が起きた。

この事件を通し、『日米安保条約』『地位協定』という言葉がマスコミをにぎわしている。

三十五年前、世論を大きく動かした安保ではあるが、今や死語となってしまった感がある。

基地なし県民として、直面していない事もあると思うが、駐留米軍運営費として、二千七百億円もの血税が運用されている事実も忘れてはいけない。これだけの金がもっと国民生活に活されたらと思う。

日々の生活に追れる事なく、日本を住み易い国にするのも私達の責任だと思う。

ともしつづけよう！『平和の灯』

戦後五十年を迎え、様々な催しが各地で行われている。多くの苦しみ・悲しみがあった事実を私たちはいつまでも心に留めておかなければならない。竜丘でも「飯田時又灯ろう流し」にあわせ、「平和の灯」セレモニーがおごそかに行われた。

今年は戦後五十年、八月十五日を中心に、多くの平和祈念事業が開かれました。

竜丘では十六日の灯ろう流しにあわせて「平和の灯」セレモニーが行われました。

これは、灯ろう流し実行委員会事業部で計画されたもので、全国各地にある平和の灯を分火してもらい灯ろう流しのシンボルとしようというものです。

計画が持ち上がったのは七月一日、最初の事業部打合わせ会のことでした。昭和初期から続けられている灯ろう流しが精霊の供養と平和を願う行事であること、そしてこの灯ろう流しも戦時中は一時中断され、復活に多くの努力があったという事実を考えたとき、戦後五十年の今年こそ灯ろう流しに新たな位置付けを、と考えたのがきっかけです。

また、事業部のメンバーの一人が広島と長崎を訪問した経験から地域の平和活動を大切にしなくてはならないと感じたことなどを話し、事業として計画することになりました。

計画が決定してから当日まで期間が短かったため、いろいろと苦労もあったそうですが、セレモニーの中心となる「平和の灯」を伊那市から分けてもらうなど、多くの協力が得られ実行に移されました。

当日午後六時、過去の戦争において犠牲になられた戦没者の霊に黙祷を捧げたあと、一九九〇年八月から伊那市丸山公園の平和の塔で燃え続けている伊那市の灯が長石寺の提灯とランプ二つに分火されました。

飯田市長の挨拶に続いて、伊那市で灯を守っている世話人の一人、小林史麿さんが挨拶され、平和活動の大切さを語られました。

その後、参加者全員が手を取り平和への思いを表わす「平和の波」を行い、さらに、白寿会、壮年団、遺族会など十一団体の代表による献花が行われ、式は閉じました。

時又港に設けられた祭壇場で荘厳に燃える火は、町内巡行と灯ろう流し場に分火され、精霊を運んで川を下っていきました。

事業部の方のお話では初回の今年の成果を踏まえ、来年以降も各地の平和の灯を加えていきたいとのことです。また、折り鶴の募集や、さらに将来的にはシンボルとなる平和の塔の建立なども考えていきたいとのことでした。

なお、この「平和の灯」は、現在、長石寺で守られています。

分火される平和の灯

小僧の敗戦

駄科　塩澤義男さん

昭和十七年四月に竜丘国民学校へ入学した。東・中・西組の男女混合の三学級で私は東組。担任は長瀬三郎先生であった。サイタサイタサクラガサイタ。ススメススメヘイタイススメ。が国語との出合。戦火が激しくなり三年の時に編成替があった。長男長女を集めて産めよ殖やせよの国策に添って中組。次男以下鉄砲玉に当ってもいい男ばかりの東組。従軍看護婦をめざす女ばかりの西組。兄貴が死んで私は後継ぎだが、戸籍が次男のため東組へ入れられて男ばかりの悪童集団をつくり、銃後の護りの名のもとに、あらんかぎりのいたずらをした。昭和十九年のことであった。

学校へは東京から守山国民学校集団疎開があり、開善寺様で寝泊りしていた。ソカイとかリョウセイとか呼んでいじめた。戦争に負けて都会へ帰るときの記念写真を万寿山で撮った。その写真を見ると万寿山はころ坊主の丘で、桜の木は一m位で一握りより細い。

学校の校庭へ防空壕をつくった。万寿山の下の辺から松の丸太を引きづって来た記憶は鮮明に残っている。防空壕では学校が狙われたときは全員だめになると云うことで、近くの森や林へ退避訓練をした。私達はカゴヤさんの前のお墓のしげみにかくれる訓練をした。防空壕の上はさつまいもをつくった。近くの集会所で分散授業をした。私達は小池の集会所だった。机と腰掛けを運ぶのは大変に重かった記憶が残っている。白い壁はススを塗って標的からかくした。学校もお寺も金もちも貧乏もみな同じだった。ヒコクミンと呼ばれることは耐えがたい屈辱だった。「ホシガリマセンカツマデワ」だったが、負けた。奉安殿も忠霊室もまもなく消えて、鉄砲の盾になりそこねた小僧達は、野球小僧への時代に進んでいった。

疎開児童たちとお別れの一枚　丸坊主の万寿山にて

思い出のうた　竜丘国民学校校歌

「赤石の山さんたる陽」で始まる校歌を知っていますか。これは、竜丘国民学校の校歌です。

明治五年に発足し、明治四十年に合併した「竜丘尋常高等小学校」は、昭和十六年に「竜丘国民学校」と改称されました。

昭和十一年に、伊賀良村より就任された、木下新一校長先生は、伊賀良村にあった校歌が竜丘には無いと、「五輪新司郎」のペンネームで作詞をされました。作詞については国語担任だった岩崎正二先生にも相談されて、昭和十五～十六年頃に発表されました。

昭和十六年は知っての通り、太平洋戦争の開戦の年です。そして、昭和二十年八月には、終戦となりました。

混乱の最中、戦時中の教育を否定し改ためる中で、この「竜丘国民学校校歌」は歌われなくなりました。五番の歌詞が問題になったようにも思えます。

昭和二十二年には、教育基本法が施行され「竜丘小学校」に生まれ変わりました。

そして「竜丘行進曲（丘のこども）」が校歌代わりに歌われ、昭和四十七年に行なわれた「竜丘学校の百年事業」で、実行委員会よりプレゼントされたのが、現在の校歌です。

開戦の頃に歌われ始め、終戦と共に消えていった校歌。激動の時代を小学生として過した人達にとって、五十年前のこの校歌から思い起される記憶は、楽しい事ばかりではないと思います。それでも、当時を振り返って語って下さった関島アキ子さん（長野原）塩澤義男さん（駄科）は、今もこの歌を歌い続けています。二人にとって他の校歌は無いのだから。

どの校歌にも想い出が込められていると思いますが、願わくば、今後歌いつがれる校歌からは、楽しい想い出がわき出る事を望みます。

竜丘国民学校校歌

五輪新司郎　作詞
中田精一郎　作曲

一、赤石の山、燦たる陽
真向かにうけて竜丘は
駄科、時又、長野原
桐林区　に上川路
五つの里ぞ　鎧ひたつ

二、天与の沃土、しげる蒼生
うかの生業いそしみて
蚕飼の業もいやすすめ
人の和をもて、栄えこし
文化はここに三千年

三、残れる古墳、数二百
歴史を語る、石器、土器
鈴岡城に、ますらおの
練武の音か、松の風
鍛えし　ちなり今もなほ

四、法の鐘なる開善寺
弘誓の船や、天竜の
流れはつきず、たぎつ水
丘のちしおに、しずまりて
伝統たかし、信天村
ああ我れらここに、生をうけ

五、皇国の使命かたにおい
御祖の霊と共に生き
厳たる啓示に、臣節を
践みて郷土を守らなん
守りて進まん、いざやいざ

数字で見る竜丘今むかし

戦争が終わって半世紀が過ぎ、竜丘地区にも当時からは想像もつかない変貌を遂げています。

この間に、飯田市との合併、多くの自然災害、国道バイパスの開通、治水事業の着手と社会的、経済的に転機となる数多くの事柄を経験してきました。

戦後間もない頃と、現在がどのように変わったか検証するため、統計を紹介してみます。

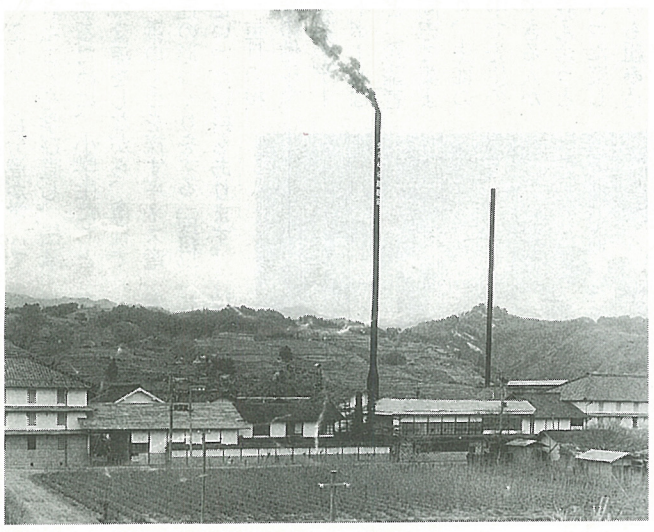
世帯数	昭二二	八二八世帯
	平七	五四七八人
人口	平七	一九二五世帯
	平七	六六五〇人
小学校児童数	昭二二	一〇四二人
	平七	四七九人
農家戸数	昭二二	五八一戸
	平七	四四〇戸（うち専業四三戸）
耕地面積	昭二二	三三二、八ha
	内水田	一二九、九ha
	平七	二二一、〇ha
	内水田	七三、〇ha
消防団定員	昭二六	二〇〇人
	平七	八五人
電話加入数	昭二二	五七
	平七	二七六〇（二六局）

（資料、竜丘村誌、竜丘時報、各所管所取材）

以上、分かる範囲で取材しました。増えているもの、また減っているものそれぞれですが、五十年という歳月の重さを感じます。

戦後の苦しかった頃から、困難を乗り越え、今日を築いた幾多の先輩に感謝の意を表します。

また、時代は変わっても、郷土を愛する心と、平和を願う心を次代へ継承しなければならないと痛切に感じました。


産業組合　龍西館

編集後記

今回の館報たつおか発行に際しましては、「戦後五十年」ということで地区民の方々に投稿をお願いしましたところ、駄科の塩沢さんをはじめ時又の今村さん、他にペンネームの方も含め、多数の原稿をお寄せいただきましてまことにありがとうございました。

寄せていただきました原稿のすべてを掲載すべきところですが、紙面の都合もあり載せることができませんでした。今後機会がありましたら掲載する予定でいますので、お許し願えたらと思います。

また、広報委員が取材などで伺うこともあるかと思いますが、その折にはご協力をよろしくお願いします。

「館報たつおか」に対するご意見、ご要望などありましたら竜丘公民館までおよせ下さい。